

現在、囲碁は中国で生まれたという説が有力視されているが、考古学的、学術的な根拠に基づいたものではなく、推測の域を出ていない。ただ「論語」の中で孔子が囲碁について触れていることから2500年前には碁が盛んだったようである。

また、どの様にひろまっていったのかも起源と同様によくわかっていない。碁盤、碁石は占いの道具や歴法につかわれたという説もある。「三国志」にも囲碁の場面が登場し、その時代には囲碁が楽しまれていたことは確実ではあるが、急速に発展したのは隋唐の時代の頃である。この時代になると混在していた碁盤のサイズが十九路に統一されていく。

当時の中国で盛んで有った囲碁が日本に伝えられたのはいつなのかもはっきりとしたことが分かっていない。大陸との交流が始まり、仏教や漢字が伝えられてきた中で囲碁も伝えられたと思われ、おおよそ五世紀ころには伝来したという説が有力である。「古事記」や「常陸国風土記」、「万葉集」には「碁」という文字が散見され、その万葉集には「碁師」が登場する。ただし、碁の字がゲームの囲碁とは結びつけられていない。残された文献が少ないので推測で語るしかない一方で、吉備真備が中国の玄宗皇帝と碁を打ち、日本に碁を伝えたという伝説も長らく信じられてきた。明らかに創作ではあるのだが、平安時代から語られていることであるので、信じる人も多かった。

奈良時代は上流階級のなかでもごく一部の間でしか楽しまれなかった。そんな中で現在まで残されている棋具に正倉院宝物の木画紫壇碁局、紅牙・紺牙撥鏤碁子がある。これらは聖武天皇が愛用したと伝えられている。

平安時代（794～1185）になると諸々の文献のなかで碁に関する記述が格段に増える。貴族階級の教養として定着していったことが分かる。囲碁好きの天皇も多く、饗宴のなかで碁が打たれていた。一方で空海は囲碁を諫める訓戒を残しているが、逆に流行しているからだとも言える。僧侶らの中でも相当碁が打たれていた。碁聖と称された寛蓮という僧が伝えられている醍醐天皇の囲碁の師匠であったようで、囲碁の礼式である「碁式」を献上した記録が残っている。「今昔物語集」に寛蓮の囲碁にまつわる逸話がある。彼が実在したかはともかくこの時代には碁の強い僧がいたことは確実である。文人の中で最初に碁を題材にした詩を歌ったのは菅原道真であり、現在でも親しまれている作品を残している。そして清少納言、紫式部が続く。「枕草子」には囲碁を題材にしたエッセイが登場し、自分が碁番に乗った話も出てくる。源氏物語は長い物語を通して、囲碁に関する道具が出てくるだけ、囲碁の故事が引用されるのも含めると囲碁に関わりのある記述が随所に登場する。対局といえば、「空蟬」の巻で空蟬と継娘の軒端萩が碁を打ち終わって終局にむかってヨセを打ち、地合を数える場面がある。物語的にはこれを光源氏が覗いていることが重要であるが、当時の碁がどのような流れで打たれていたかがわかり貴重である。他にも「竹河二」では姉妹が桜の木を賭けて対局している。「宿木」では帝と薫が三番勝負をしたなど、貴族の日常に囲碁が浸透している様子がわかる。

鎌倉時代（1185～1333）

平安時代末期になると、貴族から武士の時代へと移行する。それに相まって囲碁も武士の間に広まっていく。これまでは武芸を磨く事が第一であったが、余裕が出てきたことからと言える。

源頼朝に追われる身となった義経の忠臣佐藤忠信が碁盤を持って戦ったと言う（伝説碁番忠信）があるが、これは浄瑠璃で脚色されたもので有名となった。義経関連では弁慶が愛用したと伝えられている碁盤、碁石、碁笥が現存している。藤原定家の日記「明月記」に囲碁に関する記事が散見するが、囲碁が原因の喧嘩で揉める話もあり、物騒でもある。

歴史書「吾妻鏡」には北条義時、北条時頼などの囲碁逸話などが残されている。兼好法師の随筆「徒然草」にも囲碁に関して触れられている個所があり、囲碁に対して兼好独特の評価をしている。この時代の僧も碁を打っていたようで、道元の「正法眼蔵」には囲碁に関する記述があり、また日蓮上人が弟子と碁を打った記録も残されている。これ自体の信憑性は薄いですが、碁を知っていたようである。この頃の中国では囲碁は独自の発展をしていた。宋代（960～1279）には孫子の兵法を真似た「棋経十三篇」（張擬作）が著された。これは初めて中国の囲碁理論をまとめたものである。その後、現存最古の棋譜が集められた「忘憂清樂集」（李逸民編）が成立した。元代（1271～1368）になると「玄玄碁経」（曇天章、嚴徳甫共編）が成立する。日本でも江戸時代に同書やその解説書が刊行され（内容には異同あり）、大きな影響を与えた。明代（1368～1644）に「適情録」20巻（林応龍編）が刊行されている。

室町・安土桃山時代（1333～1603）

南北朝時代を舞台とした軍記物語「太平記」は正確な史実とは言えないものの碁について記されており、一般の兵卒にも碁が打たれていた事がわかる。貴族の間でも連続と打ち継がれていたようだが、多少のはやり廃りがあったようである。南北朝の騒乱時代は囲碁を楽しんだとの記録がほとんどなく、安定してから増え出す。社会情勢が囲碁の普及に影響を与えていたものと言える。この時代、将軍の近くで芸能を披露する「同朋衆」が制度として成立する。この中の一人であったと思われる碁打ちに重阿弥がいる。有力者が囲碁会を開き、召された強い碁打ちが披露をする儀式は増えていく。囲碁と関係のある戦国時代の武将には武田信玄、細川幽斎、真田昌幸、浅野長政、伊達政宗など著名な武将もいる。戦乱に明け暮れている中で囲碁を日常的に打つ武将ばかりでないのだが、逸話は多く残されている。天下統一も近くなると華やかな碁会が多く開かれるようになった。天下人と碁と言えば、豊臣秀吉と徳川家康が対局したと伝わる、蒔絵碁盤と両家の家紋入り碁笥が残されている。これまでは天皇家、公家、僧侶、武士といった為政者を中心として囲碁は打たれてきた。ただし、囲碁を含めた遊戯に関してはこういった人たちの記録しか残されていないので、他の階層の人たちにどれほど遊ばれていたのかはわからない。おそらく庶民への囲碁の広まりは戦国時代ごろから広まったように考えられる。江戸時代に入ると相当数広まることとなる。

戦国時代末期になると碁打ちの数は飛躍的に増えた。彼らの中から後に日本の囲碁制度の礎を築いた本因坊算砂が登場する。本因坊とは京都・寂光寺の塔頭の名に由来し、ここに住んでいた僧日海（のち算砂）が名乗った事に始まり、後に囲碁の家元の名になっていった。算砂は仙也という碁打ちを師とし、早い段階より碁を学び、公家や武士に認められるようになり、後に徳川家康に気に入られて様々な碁会に呼ばれるようになる。家康が幕府を開いた年には後陽成天皇の御前で天覧碁を披露する。幕府より算砂ら碁打ちに俸禄が支給される。碁打ちとして同時代で最も強いとされた算砂であったが、その他の功績に棋譜を残す習慣を定着させたことが挙げられる。棋譜を残すことにより技術的研究ができ、後世に大きな影響を残した。また日本最古の囲碁の本「本因坊碁経」を残している。中村道碩、本因坊算悦ら多くの弟子を育てた。本因坊算砂の時代、幕府からの俸禄は碁打ち個人に与えられたものであったが、後に囲碁の家元制度が整備されて各家元に俸禄が与えられるようになった。本因坊家、安井家、井上家、林家と「囲碁四家」が成立し、この中で争い技芸を高めていくこととなる。そして幕府の寺社奉行の所属になる中で、碁が芸として認められて、碁打ちの社会的地位は高くなっていった。ちなみに算砂は将棋も非常に強く、囲碁と同様に将棋も芸として認められ、幕府の組織に組み込まれていく。

囲碁界を統括する地位に碁所（名人）というものがあり、幕府によって推挙されていた。しばしばそれに就くために家元間の争いが起き、江戸時代を通して六人しか就任しておらず、空位の時期もあった。江戸時代、囲碁界最大の行事に年に一度開かれる御城碁というものがある。もともと公家や大名の前で囲碁を披露する碁会が開かれていたものが、将軍の前で技芸を披露する江戸城の儀礼の1つになったものである。将棋と一諸に開かれていて、その時々強豪が出仕した。始まったころはその場で勝負をつけていたが、一日で終わらないことがあり、事前に対局を行っておいて（下打ち）当日それを披露するという制度に変わった。

幕末期における徳川幕府の財政の悪化は、碁所就任願いの却下、御城碁の休止など囲碁家元四家にも大きな影響を与えた。幕府の崩壊とともに保護制度の下にあった家元四家は困窮することになり、制度自体の存続が厳しくなる。棋士たちは自分の手によって生活をしていかななくてはならなくなった。さらに碁界の最重要問題である後継者選びは、為政者の権威の下で決める事が不可能となり、紛争が起こる原因となってしまった。このような状況下、幕府の庇護を離れ、政財界の要人、実力者の支援を受けながらも、江戸時代後半より庶民に広まった礎をもとに、普及活動に力を入れていくようになる。

そういった背景のなかで、明治十二年には、本因坊家出身の村瀬秀甫らによって、囲碁団体「方円社」が設立されることになる。主な功績として機関誌「囲碁新報」の発行、段位制度の改革、欧米人への囲碁普及などが挙げられる。ただし、すべて成功したというわけでもなく、本因坊家（坊門）との対立も続いた。大正末期まで、専門棋士の間では、各団体が集合離散を繰り返し、統一した囲碁組織が設立されることはなかった。大正後半になり結社の機運が高まり大倉喜七郎のバックアップもあり日本棋院が結成された。 完